

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

| | |
|--|--------------------|
| 論文提出者氏名 | 仙石 知子 |
| 論文題目 | 毛宗崗批評『三国志演義』の思想的研究 |
| 審査要旨 | |
| <p>本論文は、毛綸・毛宗崗親子によってまとめられた毛宗崗批評『三国志演義』(以下、毛宗崗本とする)の思想的特徴を明らかにするため、その表現技法と描かれた時代風潮を検討したものである。従来の研究のように『三国志演義』の原作者と言われる羅貫中の原本を推測し、あるいは毛宗崗本に至るまでの版本の系譜を調査することからは、明清小説における『三国志演義』の位置を定めることができないと考えるためである。具体的な方法論としては、『李卓吾先生批評三国志』(以下、李卓吾本)からの書き換えと共に、毛宗崗本の評に注目する。そこに毛宗崗本が目指した理想の「古本」のあり方と『三国志演義』の視座が明瞭に現れるためである。</p> <p>本論文は、毛宗崗本の表現技法における特徴として、以下の四点を明らかにした。</p> <p>第一は、人物像に一貫性を持たせることである。毛宗崗本は、主役である劉備を「仁」の人と描いて物語の中心に置き、聖人君子とすることで、対照的に描かれる「奸」絶曹操を際立たせると共に、「義」絶関羽・「智」絶諸葛亮の活躍を描く。こうした役割分担は、すでに嘉靖本から見られる『三国志演義』の基本的な構図であった。しかし、毛宗崗本が種本とした李卓吾本は、その場面ごとの理解を先行させるために、そうした構図が一貫して描かれているとは言えない。毛宗崗本は、物語を展開する主人公である劉備を「仁」の人として一貫して描くことを優先した。それは、毛宗崗本の小説としての完成度を高めるものである。こうして毛宗崗本は、一つの場面ごとの面白さの追究を優先する李卓吾本を抑えて、『三国志演義』の通行本へと押し上げられたのである。</p> <p>第二は、「奸」絶の曹操、「義」絶の関羽、「智」絶の諸葛亮という「三絶」を物語の中核に据えることにある。李卓吾本は、物語に「三絶」という核がないため、所与の物語の場面に応じた評をその場限りで付けている。ある場面では、口を極めて諸葛亮を非難する評を付けるのはそのためである。これに対して、毛宗崗本は、諸葛亮を「三絶」の中の「智」絶として表現するため、諸葛亮の行動に一貫性を持たせ、諸葛亮の無謬性を保つために物語を書き換える。そして、その改変は「古本」三国志に基づいて校訂した、という立場を取ることで、改変した文章に自らの評を付けることを可能にした。その評には、自らの改変の意図ばかりでなく、「三絶」に焦点を当てた読み方も記される。こうして、毛宗崗本は、「三絶」という主役の人物像を一貫して描き出すのである。</p> <p>第三は、細部に至るまでの綿密な表現にある。『三国志演義』が、関羽に代表される義を宣揚するとともに、漢への忠を中心として描く小説であることは言うまでもない。たとえば、諸葛亮の忠は、陳寿がその「出師表」を中心に置くように、歴史書『三国志』の主題でもあり、小説『三国志演義』においても、十二分に強調されている。毛宗崗本は、そうした漢への忠や義の尊重を貂蟬など女性の表現にまで行き届かせていく。物語の細部にまで主題が統一的に表現されていることが、文学としての完成度を示す指標の一つであるならば、毛宗崗本は、李卓吾本を代表とするそれまでの『三国志演義』に比べて、完成度の高い文学作品と言えよう。</p> <p>第四は、社会通念の利用にある。曹操を異姓養子の子と批判しながらも、史実の劉備が異姓養子の劉封を収めていることについて、毛宗崗本は、李卓吾本よりも劉封を貶める表現を用いることで対応した。律で禁じられていた異姓養子をとった劉備が、その異姓養子である劉封の死去を嘆く場面を削り、劉備の死後、劉禅のもとで独裁権を振るう諸葛亮が、劉封殺害を進言したことも削除する。こうした書き換えの背景にあったものは、異姓養子を取る慣行に対して、本来それは行うべきではない、とする明清時代の社会通念であった。毛宗崗本は、こうした社会通念を利用した表現技法により、異姓養子劉封の忠義を封印したのである。</p> <p>毛宗崗本が利用する社会通念の解明は、毛宗崗本が著された清初の時代風潮の解明に繋がる。本論文で</p> | |

氏名 仙石 知子

は、毛宗崗本に描かれた時代風潮を次のように明らかにした。

毛宗崗本は、朱子学の「義」に基づいて、三国時代の歴史物語を分かり易く説明することを目指した。具体的には、「子以母貴、母以子貴」という「春秋の義」を淵源とし、中国近世の族譜や清律にも規定されていた母と子の関係についての社会通念を踏まえることで、劉禅・諸葛瞻といった蜀漢の子たちを母によって尊重する。その際、諸葛瞻は、李卓吾本では曖昧であった漢への「忠」を明確になるよう書き換えられている。諸葛瞻の「忠」を明確にすることで、「出師表」などに表現される諸葛亮の「忠」を一層引き立てている。

こうした書き換えの結果、物語の主人公である劉備は「仁」、三絶のうち「義」絶の関羽は「義」、「智」絶の諸葛亮は「智」に基づく無謬性のほかに、子の諸葛瞻の「忠」を母の尊さによって表現した。また、「奸」絶の曹操は、その「偽」を愛情からの落差の中に表現した。これらの主要人物のほか、たとえば「忠」と「孝」の狭間に苦しむ徐庶の葛藤を救い出すと共に劉備の「仁」を確認し、貂蟬の「孝」と漢への「義」が貞節よりも優先されることなど女性たちの漢への「義」を描き出している。「仁」・「義」・「智」・「孝」・「忠」といった規範は、すべて儒教、なかでも朱子学の倫理観に基づく。しかし、毛宗崗本に対して、封建道徳を肯定した、あるいは朱子学に基づく思想が見られる、と指摘することは、何も指摘していないに等しい。明清時代の知識人層が、科挙のために朱子学を学び、それを身体化していることは、毛綸・毛宗崗父子に限らず、当然のことだからである。

それを前提としたうえで、たとえば、女性が最優先すべきと考えられていた徳目である貞節が、親への「孝」や漢への「義」に比べると下位に置かれる貂蟬への表現や、『孝経』では、両立できると言われる「忠」と「孝」の狭間に苦しむ徐庶の表現など、朱子学に覆われた時代の中で生きる人々の具体的な行動規範が、当該時代の社会通念を背景に描かれている点にこそ、注目すべきである。そして、毛宗崗本の強調する関羽の「義」が、朱子学で最も尊重すべきとされ、『三国志演義』そのものの存立の基盤にある国家の正統性の義よりも、「利他の義」という関帝信仰に基づく「義」であったように、朱子学だけで覆いきれない人々の信仰心の拠り所が、道教に置かれていたことも、確認されるべきである。そして、関羽の「義」の中で毛宗崗本から新たに加えられたものは、商人層が重視すべき「男女の義」であった。そこからは、新たな読者層として遠隔地貿易の担い手に成長していた客商が想定される。

このように、毛宗崗本には、「仁」・「義」・「智」・「孝」・「忠」といった朱子学の規範を根底に置きながらも、その時代を生きた知識人層と商人の上層部が共感する時代風潮が表現されている。朱子学が社会に受容されていくときに生ずる柔軟な解釈や、朱子学だけでは埋まらない信仰などへの共感が、毛宗崗本を通行本へと押し上げたのである。

以上のような本論文に対して、公開審査会では、毛宗崗本の受容層をさらに解明する必要性、あるいは「義」に代表される儒教的な徳目に対して、朱子学にさらに踏み込んだ詳細な追究を求める指摘もあったが、本研究が、毛宗崗本に関する日本で唯一の本格的な研究であること、小説の中から当該時代の社会風潮を探ろうとする積極的な意欲などが高く評価された。本審査会は、全員一致で、本論文が学位を授与するに相応しい論文であると認めるものである。

| 公開審査会開催日 | 2017年 2月 22日 | | | |
|----------|---------------|-------|---------|------------|
| 審査委員資格 | 所属機関名称・資格 | 氏名 | 専門分野 | 博士学位名称 |
| 主任審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 渡邊 義浩 | 中国思想史 | 文学博士(筑波大学) |
| 審査委員 | 早稲田大学文学学術院・教授 | 森 由利亜 | 中国近世道徳史 | |
| 審査委員 | 東北大学・名誉教授 | 小川 陽一 | 中国古小説 | 博士(文学)東北大学 |
| 審査委員 | | | | |
| 審査委員 | | | | |